

原初の箱

今回のふたつの住宅の建主の職業は経営コンサルタントとバイオリニストであり、住宅内にその職業のための機能が要求された。だから併用住宅ともいえる。そこに住む家族の人数はそれぞれ単身と4人であり、それに伴うさまざまな要求もあった。しかしそれらの要求に対処するために設計をしたのではない。それぞれの住宅に特徴が表れたとしても、そのことと個性的な職業や家族構成とは関係がない。人間のための住空間を提案する建築家が設計する住宅の本質は、どのような条件においても変わらないはずだ。

またふたつの住宅の要求条件はかなり違っていたが、その規模は同一で延べ面積は24坪である。現在の住宅の大きさは、その中で営まれる生活の必要性から決まってはこない。そのほかの諸条件により決まることが多い。住宅は広いほうがよいに決まっているが、それを許さない現実がある。だから生活要求と住宅の規模とは合致しないのだ。

ここに諸問題が発生する。建築家には生活の細かい問題を克服することが求められる。建築家はさまざまな工夫や仕掛けを提案する。しかし個人の生活を追いかけることが建築家に求められるすべてであろうか？ そのような実用的な解決手法は、現在ではハウスメーカーに求めればよい。ハウスメーカーは多くの設計士を抱え、組織的な設計体制をもつ。だから個人の建築家より効率よく実用的成果を生むはずだ。ハウスメーカーに対抗できる解決能力を個人の建築家ももち得るのか？ 住宅がもつ諸問題を解決するという消極的な意味ではなく、もっと積極的な意味を住宅設計に見い出さなければいけない。特に個人の建築家には必要だ。「住宅に何を求めるのか」という本質的な問いを常に忘れてはいけない。現在、個人の建築家の住宅設計が意義をもち得るのか？ 求めるものを見つけた建築家のみが、答えを知っている。建築家は誰よりも個性的な考え方を示さなければならない。なぜなら、その思考の振幅の大きさが新たな普

遍性を生み出す可能性をもつからだ。

私は「小さい木箱」(jt9311)の発表に際して、「建築家のつくるべき住宅は小さければ小さいほど、生活を限定しないのびやかな空間が必要である」と書いた。今回のふたつの住宅は小規模であり、広い空間の獲得には物理的な限界があった。しかし私はいつものように住宅内にのびやかな空間を求めた。それに加えて小住宅だからこそ有効に働く住宅デザインの手法を探った。

忙しい現代の人びとは、生活する中で空間を意識することがあるのだろうか。現在、人間と空間との関係が希薄になっている。本来「住まう」ことの実感人間と空間とのぶつかり合いの中から誘発されるのではないか。ものとしての住宅と人間との存在を認識するとき、人間と住宅との原初的な関係を感じる。それが人間と住宅とのはじめての接点である。全体を意識しやすい小住宅ほど、この関係の実感をもつはずだ。私はこの点に小住宅のデザインの可能性を見る。その答えが裸の骨組みをもつ単純な箱である。

私のつくる住宅の木箱は箱を構成する6面が可視的な単純なものだ。1枚の写真でも理解し得る「ただそれだけの箱」が私の理想だ。内部に視線を遮るものをなくし、壁は外周だけにする。住宅全体を占めるひとつの広い空間を求める。外部からはもちろん、内部からも住宅の全体を見わたせる。部分からではなく全体から住宅を語りたい。それはものとしての住宅自体を意識させたいからだ。仕上げを施すと住宅の構成はわかりにくい。仕上材や部分の詳細にこだわるのが住宅の存在を希薄にしている。私は明快な住宅像を望むため、仕上げ材やディテールをできるだけ省いた。内部の仕上げを省くことは、柱・梁はもちろん垂木や根太や間柱などの構造材を表すことになる。そこに表れる裸の骨組みは、全体の構成を理解させる。その結果、構造がむき出しの箱は、住宅を単純な箱として強く意識させる。

その単純な箱に残るものは、ひとつの空間と全体の形である。ここにきて全体の形が主要

な問題となる。建築はものであるからどうしても形をもつことになる。だから建築家は形を決めなくてはならない。「傾斜地の木箱」は林の中の斜面に置かれた住宅である。どのように置くのかを考えると、自然に対して強い形が必要であると感じた。自然と調和する形ではなく、絶縁する人工の明快な形だ。傾斜した土地が誘発する異形の箱である。外形が完成したとき、形のもつ可能性を感じた。形への手がかりを少しつかんだような気がしている。自然の中であるからこそ人間がつくる形への欲求が素直に生まれた。ものとしての住宅をつくる建築家は形をつくることを放棄してはいけないと改めて感じる。混沌とした現代において必要なのは、単純で基本的な形「原初の箱」だ。これこそが、「異形の箱」として私の求めるものなのだ。



傾斜地の木箱 外観



段地の木箱 外観